

## 詩篇19篇 「神の三つの声」

### 1A 自然の声 1-6

### 2A 御言葉の声 7-11

### 3A 良心の声 12-14

## 本文

私たちは聖書通読の学びで、16 篇まで来ました。今日は 17 篇から 21 篇までを学びたいと思いますが、今朝は 19 篇を見ていきます。ここ一か月ほど、私たちは新しい信者のための学びで取り上げられている内容が、ちょうど礼拝での説教箇所の内容と重なっていることを見てきました。キリストにある者は新しく造られた者で、古いものは過ぎ去った、ということ学びました。そして次に、先週は「天の望み」について学びました。「見よ、すべてが新しくなりました。」とパウロが言ったように、キリストを信じた者には死を越えて、はるか将来にある希望を今、そのまま抱いて生きることができることを話しました。

そして今朝、私たちは「神の御言葉」について学びました。この聖書の言葉です。この聖書の言葉が、神から来たものであり、私たちに確かさを与えてくれるものであることを見ました。ペテロが高い山に、ヨハネとヤコブと共にイエス様によって上った時に、イエス様が栄光の姿に変わるのを目撃しました。それはすばらしい光景でした。そして天から、神の声もしたのです。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。(2ペテロ 1:17)」これこそ、確かな神との体験ではないでしょうか。ところがペテロは大胆にもこう言うのです。「また、私たちは、さらに確かな預言の言葉を持っています。(19 節)」自分の肉眼で目撃し、自分の耳で聞いたのに、それよりも預言の言葉、すなわち聖書の言葉は確かだ、というのです。

ですから私たちは、神を知るのに毎週の礼拝がわくわくするのです。この肉眼では神がおられることを確かめることができません。礼拝の場所の一部が光り輝くということもありません。いや、そうした物理的な現象以上に、聖霊が私たちをすべての真理に導いてくださり、神がおられることを示してくださいませ。

### 1A 自然の声 1-6

#### 19 指揮者のために。ダビデの賛歌

著者のダビデはこの賛歌で、三つの方法による神の声を教えています。一つは、自然による神の声です。自然界、具体的には天体の動きにおいて神の声を聞けると言います。1 節から 6 節までです。そして二つ目は、神の教えによって、神の言葉、聖書によって神の声を聞けることを話します。それが 7 節から 11 節です。そして三つ目に、私たちの良心を通して神の声を聞けます。12 節

から 14 節です。神への畏敬、こんなに神がすばらしい方で、畏れ多い方なのだということを知っていただければ幸いです。

19:1 天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。19:2 昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。19:3 話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。19:4 しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。19:5 太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。19:6 その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない。

皆さんが子供の頃、いや今でもわくわくすることの一つに、太陽や他の天体の動きを見ることではなかったでしょうか？私が信仰を持ったのは 19 歳の時で、信仰心やそのようなものがなかった時、中学生の時でもあっても理科の時間に太陽の黄道、つまり空においてどの道を通るのかを辿るのはとてもわくわくしました。なぜ、こんなにも精密に、決められた軌道を通るのかが不思議でした。そして小学生の時、自宅は南側を向いていましたが、自分の家の左側から太陽が上がって、屋には正面に来て、夕方になると右、すなわち西に日が沈む姿を見て、不思議な気持ちになりました。

けれども、その不思議がどこから来ているかを教えてくれる人は誰もいませんでした。自分の部屋は二階にあってベランダがありましたが、とりあえず学校かどこかで教わったてる坊主を作り、次の日が天気になるように祈りました。ところが祈りが聞かれませんでした。非常に怒って、「こんなもの、信じてたまるか！」とつぶやいたのを覚えています。

けれども大学二年生になる直前に、イエス様を自分の主として受け入れる決心をしました。その時から、これまでは偶然だと思っていた自然現象、またそれらが神々だと教えられていたものを、神が造られたものであると見てみました。するとすごいことが起きたのです。山から、木々から、畑から、そして太陽から、自然の大合唱が聞こえてきました。もちろん物理的に聞こえたものではありません。けれども、お天道様とか思っていた時には、決して太陽は私に話しかけませんでした。しかし、神が太陽を動かしておられる、その天地創造の神がおられることを思って太陽があることを思うと、創造の神である方が確かに、私の心と魂に鮮やかに、この心を癒すように、ちょうど日光浴をする体が癒しを受けるように、私の魂を癒したのです。

これが、ここでダビデが賛美していることです。自然界から声が物理的には聞こえてきません。しかし、世界中に、どこも余すところなく、昼があるところであればどこでも、神の声が響き渡っています。神が生きておられること、そして神の造られた被造物も生きていることを教えてくれます。使徒パウロは言いました。「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解

の余地はないのです。(ローマ 1:20)「だれも弁解することはできません。「これまでキリスト教について聞いてこなかった。だから分からない。」とは言えないのです。太陽がある、昼があるということは、創造主の声を聞く機会が与えられています。

## **2A 御言葉の声 7-11**

19:7 主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。19:8 主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする。

自然によって神の声が聞こえるのを、難しい言葉で「自然啓示」と言います。神が、自然を通してご自身を示される、現すということです。けれども、自然だけでは神の全てを知ることができません。神はご自身の姿を特別に現してくださいました。それは、「特別啓示」と言います。それが聖書であります。1 節から 6 節までの主語を見てください、「神」となっています。けれども 7 節から 11 節までは、太字で「主」となっています。これは名前であり、ヤハウェであります。「一つになる方」という意味です。私たちの必要と一つになる方、ということです。つまり、個人的に関わってくださる神だということです。

主の教えが与えられたのは、その文字が与えられたのはモーセによってでした。彼は羊を飼っていて、ホレブという山に来た時に燃える柴を目撃しました。ところが柴が燃え尽きない。それで近づいて見ると、なんと声がするのです。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。(出エジプト 3:6)」そして、「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、全能の神として現われたが、主(ヤハウェ)という名では、わたしを彼らに知らせなかった。(6:3)」とも言われました。

かつては、大まかななすべきことを神は時々語られましたが、モーセに対しては、実に事細かい指示を出されました。これからイスラエルの民族がエジプトから出て、約束の地に動き、そこでどのように生活するのか、その細かいことまでいろいろと語られたのです。例えば、申命記 22 章 8 節に「新しい家を建てるときは、屋上に手すりをつけなさい。万一、だれかがそこから落ちて、あなたの家は血の罪を負うことがないために。」とあります。今、何か建物を建てるなら、行政によって安全基準が定められていますね。そのような高度な社会生活をするように、神はご自分の言葉で語ってくださったのです。

したがって、私たちは個人的に、聖書によって神に関わることができます。日々の生活で、実の一つ一つの場面において神はそれに関心を持っておられて、聖霊によって、聖書の言葉を通して語りかけてくださるのです。

初めは、神の言葉が「神のみおしえ」と呼ばれています。ヘブル語では「トーラ」と言い、しばしば律法と訳されます。「矢を放つ」というのが元々の意味です。学校において教師が、目標を掲げて

それに向かって教えていく、そうしたイメージです。

そしてヤハウエの教えは「完全」です。私たちが人から受ける教え、つまり、その指導は変わりません。完全ではありません、欠けたところがあります。けれども、主の教えられることは欠けがありません。付け足す必要はないし、取り除く必要もありません(黙示 22:18-19 参照)。これで完全であり、十分なのです。だから楽です。主の教えに頼っていれば、主が、私たちが神を信じて生きるために必要な全ての指針を与えてくださるのです。

そこで主の教えは、「たましいを生き返らせ」ことができると言います。私たちは罪によって汚された世界に生きています。最初の人アダムが罪を犯したことによって、罪と死が入り込んでしまいました。そして、肉体は生きていても罪の中に死んでしまっています。したがって、神が初めに造られたところの本来の生き方から離れているのです。しかし、主の教えは私たちの魂を生き返らせます。本来の神のかたちに回復する力を持っています。壊れた生活になっていますか？壊れた人生になっていますか？壊れた思考回路になっていますか？自分はこうなるために生まれてきたはずではないのに、と思っておられますか？主の教えは、あなたの魂を生かすことができます。

そして、「主のあかしは確か」とあります。「あかし」というのは、神ご自身についての証言です。「わたしは、こういうものである。わたしは、これこれのことをする。」という証言です。確かに神は、ご自分がそうだとされたことについて真実であり、これこれのことをすると言われるとそれはその通り、実現します。神の言われていることは確かなのです。そしてこの確かな証しによって、「わきまえのない者を賢くする」とあります。これまで、愚かな選択をしてしまって、それで苦しんでおられるかもしれません。けれども、魂を生かすとあるように、主の言葉は私たちを回復させます。そして、その悔いた魂は二度と、その愚かな道を歩まないようにという神の証しを、喜んで聞いています。それで賢くなっているのです。

そして、「主の戒めは正し」とあります。ここの「戒め」は、「定め」と訳したほうがよい言葉です。規定と言ってもよいでしょうか。さばきつかさ、裁判官が一つ一つの事件や訴訟に判決を下す時に必要な定めであります。つまり、教えよりもさらに細かい定めのことを話しています。その定めについて聞けば、「人の心を喜ばせ」とあります。定めがなぜ私たちの心を喜ばせるのでしょうか？定めは私たちの心をかえって縛るものではないか、と思うかもしれません。いいえ、定めには背けば喜びどころか、悲しみが襲ってきます。主の定めておられる事には知恵があるので、私たちが喜びある生活が守られるための枠組みを与えてくれます。

そして、「主の仰せはきよ」とあります。ここの「仰せ」は、命じることです。命令です。主が命じられる時、その命令には不純物がありません。主が不純な動機をもって命じておられることはありません。主が、善悪の知識の木をエデンの園の中央に置かれて、「それから実を取って食べるはならない。食べると必ず死ぬ。」と言われた時に、悪魔が唆したように、「それを食べると神のよ

うに賢くなって、善悪を知るのを神は知っているからだ」というものではなかったのです。神は、そうした不純な動機をもって命令されたわけではありません。

したがって、そのような聖い命令は、「人の目を明るくする。」とあります。心のきよい者は幸いであり、その人は神を見るとイエス様は言われました。主の命令に従うと、見えるものが見えるようになってきます。主の言葉は、ただ頭で受け入れるだけでは見えてきません。それに聞いて、応答する時に、見えるものが見えてきます。何が完全で、良いことか、神の願っておられることなのかを見ることが出来ます。

19:9 主への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。主のさばきはまことであり、ことごとく正しい。

興味深いことに、主の言葉について、「主への恐れ」という名称もあります。主への恐れというのも、神の言葉に相応しい名です。恐れというのは、畏れかしこむことです。恐怖のことではありません。主が語られることを、そっくりそのまま、真面目に、本気で受けとめるということです。自分の悟りに頼らずに、力を尽くして主に拠り頼むことです。それは、「とこしえまでも変わらない」ということです。伝道者の書で、ソロモンが晩年に、「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。(12:13)」と言いました。彼ほど賢い人はいなかったはずですが、彼はいろいろ試してみて、結局のところ主を敬って、主の命じられることを行ないなさいと言ったのです。これは永遠の不変であります。

そして最後に、「主のさばきはまこと」であるとあります。これは主の判断です。主がどのように善悪を判断しておられるかの基準のことです。これは真実であり、正しいとあります。私たちは、自分たちの判断基準で、このことは正しくないのではないか、と周りのことを見ていると思ってしまう。例えば、イエスのみが道であり、真理であり、命というのは、狭すぎないかと言います。そうなのでしょうか、イエスが誰かを知れば、キリストこそが全ての全てであられ、この方にこそ命があり、真理があり、この方が確かに道であることを知ります。他に救いの道がないことを知ります。

また、私たちはこの世で起こっていることで、これは間違っていると感じる時があります。主がこのようなことを許されるのはどうなのか？と疑問に思うことがあります。しかし、天に入って完全に納得します。終わりの日、天に大群衆の大きい声があつて、「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。(黙示 19:1-2)」と言います。この裁き、判断でびったしだ！と私たちは天においては完全に納得し、満足するのです。

19:10 それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。

19:11 また、それによって、あなたのしもべは戒めを受ける。それを守れば、報いは大きい。

主の言葉が、実に多額のお金よりも好ましいと言っています。皆さんは、どのように生活を過ごし



ておられますか？生活の中で、聖書を開いていますか？それとも、日々の仕事があるから、聖書を開くのは後手後手になっていますか？働いたお金よりも、純金よりも聖書が好ましくなっていますか？また、蜜よりも甘いとあります。蜜は好ましいものです。また私たちに元気を与えてくれます。マラソンの選手が飲む水は、すぐに吸収するように糖分の入った水ですが、蜂蜜も似たような効力を持っています。ヨナタンがペリシテ人を追っている時に、蜂蜜を食べて目が輝きました。

それから、主のしもべ、つまり主のために働き、主に仕える者たちは聖書によってその働きが整えられます。使徒パウロがテモテに言いました。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。(2テモテ 3:16-17)」

### **3A 良心の声 12-14**

このようにして、天における神の声を聞き、具体的に御言葉によって神から戒めが与えられました。そして三つ目に、良心の中で神の声が与えられます。

19:12 だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。

ダビデは祈りを捧げています。自分の過ちというのは、自分自身でさえ気づきません。主がその言葉によって私たちの心を清めてくれますが、私たちの心の動機について、その流れについてことごとく知っておられるのは、神の聖霊です。聖霊が、その御言葉によって私たちの心を探ってください。私たち自身が実は、自分自身を知らないのです。ゆえに、主が自分に悟りを与えてくださるよう、ダビデは祈っているのです。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)」

19:13 あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。

12 節が「知らないで犯した罪」と呼ばれているのに対して、13 節の「傲慢の罪」は「故意に犯している罪」であります。知らないで犯した罪と言っても、まったく神の定めについて知らなかったということではありません。知っているけれども、肉の弱さで犯してしまうことがあります。それは、故意の罪ではありません。傲慢の罪とは、もっと計画的なものです。明らかに間違っていることを知っていても、慥然とした態度でその罪を犯すことです。そして開き直って、正しいことのために、神のために行なっているとさえ言います。「自分が間違っていたことを行なっていたかもしれない、けれども…」と自己正当化する態度のことを指します。

サウルがサムエルに対してそうでした。アマレク人を殺しなさい、すべてを打ち滅ぼし、家畜も殺しなさいという主の命令がありました。ところがサウルは、王アガグを残して、さらに家畜の最上のものは惜しみました。けれどもサムエルに、「アマレク人のところから連れて来ました。民は羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。あなたの神、主に、いけにえをささげるためです。そのほかの物は聖絶しました。(1サムエル 15:15)」サウルは、なんと自分が行なったことなのに、一般民衆がそんなことを願っているから、仕方がなくやったことなのだ。だから、それを主にいけにえとして捧げたのだ。他のものは聖絶しているし。」と、厚かましいことを言っています。

いかがでしょうか、私たちの心がいつも大きく神に開かれているのでしょうか？つまり、口では神を敬っていても、心の奥で、これは明らかに神の願っておられることではないと分かっているのに、それを告白して、神の前で悲しみ、泣くどころか、ごまかして生きてしまっていないのでしょうか？自分を正当化することをやめましょう。主は砕かれた魂を蔑むことは決してしません。ダビデは傲慢の罪から守られるよう、そこから離れることができるよう祈りました。

19:14 私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。

これがダビデの最後の祈り願いです。私たちの心から出てくるもの、その思いと、それから出てくる口のことばが、ちょうど火によるいけにえが神に受け入れられるものとなるように、神に受け入れられるいけにえとなっていますように、という祈りであります。自分の語っていることが何であるかを私たちは知っているのでしょうか？自分の思っていることが、御前ではどうなっていることなのかお分かりでしょうか？

そこでダビデは、神を「わが岩、わが贖い主、主よ。」と呼んでいます。安定で確かな方である、岩なる神が、贖い主です。贖い主とは、自分の近くにおいて、自分が売られる身であったのを買い戻してくれる存在です。例えば自分が貧しくて奴隷になりそうになっていたけれども、自分の近い親戚が大金を支払って、買い戻してくれた、という状況です。そうなってくださったのは、私たちの主イエス・キリストです。神であられるのに人となって、私たちに近づいてくださいました。そして、ご自身の血という代価を支払って、私たちを神のものとすべく買い戻してくださったのです。

この方がおられなければ、私たちは傲慢の罪から自分を守ることはできません。私たちの心は陰険であり、だれがそれを直せようかと預言者エレミヤは言いました。私たちが天における神の栄光を見て、それから主の御言葉に触れて、その中で聖霊が私たちの神の義と聖を心に示してくださいます。そこで明らかにされる罪を私たちが悔い改めます。しかし、自分は、これは手放さないとしている牙城も見つかります。それを今、手放しませんか？主の前で告白して、その罪を捨ててみませんか？贖い主なるイエス様が、かばってください、身代わりとなってくださいます。